

日本の「ひまわり」は咲いたか？ —クロアチアでボランティアとして働いた一か月—



当時早稲田大学法学部5年

現アイワ株式会社勤務 -- 森 純一

序 章

きっかけは1995年12月16日付けの読売新聞の夕刊の記事であった。たまたま学生生活最後の春休みに何をしようかと考えながら何気なく新聞を読んでいた私の目にとまったのは、「旧ユーゴのNGOに支援を」という記事であった。その内容は、クロアチアのNGO団体であるSUNCOKR ET（「ひまわり」という意味）からニコラという名のディレクターが岡山で行われる「国際貢献NGOサミット」出席のため来日し、日本からの財政支援を期待しているところであった。旧ユーゴスラヴィアの状況を新聞やテレビのニュースで知り、かわいそうだと思うながらもそれだけで何の行動も起さないうちに矛盾を感じていたので、何か自分でもできることがあればと思い、年明けの1996年一月に連絡先であった「日米文化センター」に電話したのであった。その後、二月中旬から三月中旬までクロアチアにボランティアを派遣するという話を聞き、学生生活の締めくくりとしてやってみようと思った。偶然にもこのようなチャンスがつかめたのは幸運なことだった。

派遣先はクロアチア第二の都市であるスプリットの近くのストブレツチとブラーチ島であり、それぞれ四人のメンバーが派遣される。自分は、生活環境が悪い（！？）脅されていたストブレツチ行くことが決まった。一緒に行くメンバーは、長谷川玲子さん、大谷聡君、的場大君であった。

1 ス ト ブ レ ツ チ

このようにして日本を離れ、成田→ウィーン→ザグレブ→スプリットと旅は順調に進んだ。ここでスプリットとストブレツチの紹介をしたい。スプリットは人口20万人のクロアチア第二の都市である。町の中心にはローマ帝国の時代に築かれた宮殿があり、それが町の一部となっている。1700年の歴史を持つ都市だと皆が自慢し、一見すると戦争の陰などまたくないアドリア海沿いの観光都市である。私は一遍に気に気になってしまった。そこから8kmほど行くと、キャンプのあるストブレツチに着く。バスで大体20分ぐらいである。この町は、SUNCOKRETで働くデニスによると、「ビバリーヒルズ」と呼ばれているらしく、立派なデニスコートがあり、結構きれいな家が連なっている。避難民キャンプはその中の旅行者用のキャンプ上をまるまる使っている。海があり、きれいな山があり、東京から来た自分は思わず観光客気分になってしまった。

2 キャンプの生活

ここではキャンプでの生活について解説したい。

(1) 住居

避難民の人々は、このキャンプ場にたくさん並べられたキャンピングカーのキャンピングで生活している。だいたい一家族に一台といったところか。私たち4人には大きめのキャンピング車があてがわれた。ストブレツチにおけるSUNCOKRETのリーダーであるヴェリツァは、「あなたたちには大きめのキャンピングを用意してあげるわ。ここ前には7人の家族が住んでいたのよ」と自慢したが、私にはとても信じられなかった。思わず「狭すぎる！」と言いそうになったがそれをぐっと飲み込んだ。とはいっても、果たしてこれから一か月もやっつけていけるのかとききなり不安になった。何せベッド（ソファアがベッドになる）が二つあるといってもさすがに女の子である長谷川さんと一緒に男が寝るわけにもいかず、野郎三人ひとつのベッドで寝るのである。しかし時がたつと、気がつけば誰かの手が自分の上にあるとか、ふと目が覚めるとほとんどキスしそうな位置にお互いの顔があるといった生活にも慣れ、一度ブラチ島に行ったときなど部屋が広くて落ち着かず、「家」にかえってほっとしたなどといったこともある。今考えば、あの状況で誰一人最後まで文句を言わなかったというのは、皆ほど無神経なのか環境適応能力があると思えない。

基本的に布団はなく、寝袋で寝るのだが、ほとんどヒーターをつけ放しで寝ていたため、入れ替わり立ち替わり誰かが風邪をひいているといった状況だった。

SUNCOKRETに、毛布を請求しても聞いてもらえなかった（毛布ぐらいくれてもよさそうなものだが）。その後、安田慎君が合流したため、キャンピングをもう一つ欲しいと頼んだ時も、空きがないからと断られた。しかし空きキャンピングは結構あったはずであり、このことについてデニスは、も

ともこのキャンプの経営団体（ホテル・スプリットらしい）は避難民が外国に行ってもそのことを政府に知らせず名簿場に名前を残し補助金を自分の利益にしているのではないかといっていたので、このことと関係あるかもしれないが、ここでもせいぜい政治の論理は働いているのかもしれない。

キャンプの人々はこの暮らしにもめげずに、内装をきれいにしていたり、自分なりに工夫して入り口に屋根をつけていたりして、それなりに「自分の家」を形作っていた。

(2) 食事

食事は、朝に一人一本分のパン（フランスパンのようなもの。結構大きい）の配給があり、昼にホット・ミールの配給がある。献立は、スープ、ポテト、鶏肉、などなど。まずまず食べられるのだが、自分には量が決定的に足りなかった。結局夕飯は皆で金を出しあって近くのスーパーで買い物をし自炊していた。といってもやはり他の避難民に気がねもあったので、それほど量は食はず、大分胃は小さくなったようだ。他の避難民の人はどういふ食生活をしているのかは今でも不思議であるが、子供たちを見ていると、夕飯などは、パンにソーセージやハムなどはさんだ簡単なサンドイッチなどを歩きながら食べていた。それなりに買い物もしているようであった。しかし、飢えないだけの量だが、お世辞にも十分とは言えない。

(3) シャワー

熱いお湯の出るシャワーは二か所に合わせて5個以上はある。毎日浴びようと思えば浴びられるのだが、夜は寒くて浴びにくい気になれず、昼は何かと忙しいので3日に一回くらいのペースであった。

(4) 買い物

キャンプの近くに歩いて数分のところにスーパーがあるので買い物にはとくに困らない。営業時間も夜8時までと意外に長い。しかしながら物価は余りやすすくない。元々ヨーロッパの国なのだから当然かもしれない。私たちは大体二日に一遍買い物に行き、バナナ、りんご、パンに塗るチョココレートペースト、ハム、ソーセージ、牛乳といったところを買い物し、大体100クナ位だったと思う。現地の人にとっては決して安い値段ではないと思う。

(5) ステイヴィアンとの差

ブラーチ島のキャンプを数回訪れたが、意外に差があることに驚いた。まず、建物はホテルが使われており、しっかりとしている。ひとつの家族に対してベッド及びシャワーのある部屋がいくつあてがわれており、階段の踊り場には小さなクッキングテーブルもある。食事は朝のパンの配給に加え、昼と夜の二回きちんと出て、しかもレストランの建物まであり、席に座って待っていれば配ってもらえる。

この格差は、たまたま避難してきた時期によるのかそれともくじ運によるのか。ブラーチ島にはボスニアから逃げてきたクロアチア人が多いらしく、やはりクロアチア人のほうがムスリム人よりも優遇されているのかもしれない。

3 キャンプでのアクティビティ

さて、私たちが実際に何をしにキャンプに来たのかということを説明したい。先にも説明したように、おそらく皆が最初に想像するボランティアのイメージである、飯の炊き出しや、また住居の建設などのいわゆる基本的なハード面はすでに整っているもので、我々ができることはソフト面ということになる。つまり、子供たち相手に、今日はこれをやろうとか、明日はこれといったアイデアを提供し、それを実行に移すのである。基本的には、午前中はキャンプの中にある幼稚園にて働き、昼食後、小学校及び中学校に通っている子供たちが帰ってくるので、彼ら相手にアクティビティをやるわけである。大人との交流は公式な場においてはしなかった。

(1) 幼稚園において

幼稚園において、主にやったことは、紙芝居、折り紙、縄跳びといったところがメインである。紙芝居は、あらかじめ英訳をスタッフに渡して呼んでおいてもらい、その場では最初に私たちが日本語で呼んでその後スタッフがクロアチア後で読むという形式をとった。紙芝居は予想通りなかなかの人気であった。折り紙にも子供たちは興味を示すが、何せ幼稚園児と持ち前の忍耐力のなさが手伝って、一つの作品を折らせるのもなかなか大変であった。最後のほうには私は半ば無理やり折り折らせていた。縄跳びも皆好きでよくやっていたが、困ったことに縄跳びを、どこどやうやう切ってしまう子や、家に持ち帰って返さない子供もいるので、たくさん(5~6本)持っていたほうがいいかもしれない。他にも、キックベースや色鬼、高鬼、いす取りゲームなどアイデアはいろいろあったのだが、何やかんやとやらなうちに終わってしまった。

(2) 学校から帰ってくる子供たちと

基本的に午後2時から小学校や中学校から帰ってくる子供たちと遊ぶ。スケジュールとしては、2時から2時間くらいはスポーツまたはゲームをし、その後5時くらいから日本語や英語を教えていた。その後、土曜日は映画を見る日と決められており、映画の後ダンスパーティーを開いたこともあった。

スポーツで人気があったのはダントツにサッカーであり、ほとんど毎日やっていたといってもよい。その他、バスケットボール、天大中小(足でサッカーボールを使ってやるテニスのようなもの)、卓球、女の子はドッジボールや六虫などもやった。ゲーム系ではドロケイ(彼らはポリス アンド マフィアと呼んでいた)なども人気があった。室内でやるゲームでは、ジェスチャーゲームなどもうけていた。

しかし、サッカーが人気があるといっても、さすがに毎日やっていたのは子供達も飽きるようで、バランスを取る必要がある。それにしても、女の子をまとめる大変さには驚いた。ある意味男よりたちが悪く、ちょっとしたことでもわめき出し「NO～」と怪獣のような声を出す。余り子供達に合せてばかりいても仕方がないので、多少強引に進めたほうがよさそうだった。

英語や日本語の授業は、果たしてみんなじめにやるかどうか心配だったのだが、意外と学習意欲はあった。日本語に関しては、簡単なあいさつなどを教えた。英語は、個人によってレベルの差があるので、クラス分けをする必要があるがそうだった。反省点としては、結局まともな授業をやったのはそれぞれ一回づつ位で、後は歌を歌わせるなどをしたので、もう少ししっかり教えたほうがよかつたかもしれないと思う。問題は、必ず邪魔をしたり異常にはしゃいだりする奴がいるので、そいつをいかに押さえるかがポイントだと思う。そうしないと、やる気のある子供までが気を粗がれてしまうのだ。

全体の感想としては、子供の相手をするのだからある程度子供の要望を聞く必要があるのだが、余りそれに流されないことが必要であると感じた。子供の言うことばかりを聞いていると無秩序でどうしようもなくなってしまう。SUNCOKRETは、私たちにすべてを任せてくれたので、結果にも責任を持たなければいけない。しかし、すべてを任せてくれる一方で、余り積極的にも段取りをしてくれないので、自分達で何かを計画したならば、スタッフの力を借りずに少なくとも計画だけは完璧に立てておく必要がある。例えば、私たちは、3月9日にストブレッチ、ステイヴアン、スペターの三者対抗による球技大会のようなものを企画した。アイディア自体は素晴らしいものであり、子供も非常にやる気になっていたのだが、結果は失敗だったといえる。というのは、ストブレッチ、ステイヴアンのSUNCOKRETのスタッフと私たちとの意思の疎通及び計画がうまくいかず、結局、皆試合をするつもりで来たのに一試合もできなかつた子供が半数ぐらい、女子に至っては、ドッジボールをすれば何が何の手はずも整っておらず、

道路でお遊び程度にやっただけであった。せっかくのチャンスをつぶしてしまっただけで済んでしまったことに対しては今でも悔いが残っている。結論として言えることは、もし何かイベントがやりたかったら、自分達で全てやり通すくらいの気構えが必要なのだと思います。一面で、このように前もってキャンペーンの意思の疎通と計画が必要な場合には、スタッフは余り頼りにはならない。

最後に大きなイベントとして、「日本の日」なるものを行った。これは大した準備もなかったわりにそれなりに成功した。しかし、自分たちの失敗としては、何につけても余りにもいきあたりばったりで余裕のないものであった。もう少し日本にいる段階で（状況も解らないので大変かもしれないが）自分たちの目的な計画を練っておくべきだった。私たちの場合、幸か不幸か、祭日が最初にあって実質的な活動期間が短かったため、それほど子供たちも私たちの活動に対して飽きていないようであったが、それなりに考えて一本筋の通ったことをやらないとこれ以上は子供を引き寄せることができないかもしれないということ。これは最後のほうには特に感じていた。

4 キャンプの人々

(1) 私たちに対する興味

私たち日本人は、キャンプに限らずクロアチアにおいては、まさに動物園のパンダのようなものである。町を歩けばみんなが振り返り、ある人は怪訝な顔をし、ある人（特に若い人達は）陽気に話しかけてきたり、「空手」「忍者」「ブルースリー」などという言葉を連発する。キャンプを訪れた初日など、いきなり子供たちに取り囲まれ、散歩やサッカーなどに引っぱり張り回されびっくりした覚えがある。このように、基本的には人気者なわけである意味では人の興味をひける分だけ活動はやりやすかったのである。また、私たちのメンバーは、的場君はサッカーが非常にうまいだけでなくギターを弾くなど音楽系にも強く、長谷川さんは社交家で子供を引きつけ、大谷君はバスケットという特技を持ち、私自身も空手を少ししかしたことがある。なので、メンバーがそれぞれ特技を持ち、それがまたプラスに作用したと思う。また、先にも述べたように、実質の活動期間が短かったので、人々がわたしたちに対する興味を失う前に活動が終了したとも言えるかもしれないので、もし後一週間または二週間やっていたら、彼らは興味をなくしていったかもしれない。

(2) 語学的重要性

しかし、いくら日本人が珍しいといってもやはり彼らの言語がほとんど使えないことは大きな壁であった。ほとんどの人は英語が分からないのであ

る。例を挙げると、ある少年がわたしに非常になつてくれた。彼は、いわゆるガキ大将タイプで、腕白、サッカーなどスポーツもうまく、意外と学習意欲もあった。一度山に登りにいったときなども、よほどわたしが危なっかしく見えなつかしく見えたのか、ずっと手を引いてくれた。(ほとんどおじいさんと孫である)しかしそんな彼も、最後のほうには、余りにも言葉が通じず、意思の疎通ができていないのでいらだたせてきているらしく、いつも「NO ENGLISH BOSNIAN BOSNIAN!」つまり、ボスニア語を話せといていた。このように、結局のところ、ある程度懇意になれた人は残念ながらやはり英語を得意とする人だった。言葉は確かにもっとも重要なものではないかもしれないが、もし私が彼らと同じ言語を話し、彼らの話すことを理解できたなら、また違うものが見えたに違いない。

(3) キャンプの人々の性質

基本的に、キャンプの人々は明るく、そして優しくかった。顔を会わせば、コーヒーを飲まないかといってくれたり、調理用具もほとんど貸してくれた。ケーキなども時々差し入れてくれ、悪がきたちままでがしばしば詰めやお菓子を持って現れた。「こんにちは」とあいさつすれば皆にここにこしながら挨拶を返してくれた。もちろん全員が優しいとは限らない。しかしそれはどこの世界でも同じことである。キャンプの人々は日本人より解放的であつたかもしれない。

しかし残念ながら戦争の傷跡は人々の心の中に深く残っていた。とりわけ、大人にはその影響が大きいようであつた。狭いキャビンに閉じ込められ、働き口もなく、戦争で家も財産も奪われ、これからは余りにも時間が少ないと思つている人々は、いつも憂鬱そうであつた。昼間からぶらぶらしていたり、異常に子供と一緒にいたりしている大人もいる。時には、「俺はアメリカのパイロットだつた」などとすぐに解る嘘をついたり、明らかに精神的におかしいと思われる人もいた。

子供は陰鬱になつたりすることは余りないようであるが、その代わり、勝負事に関する異常なまでの執着心、落ち着きや忍耐力のなさ、時折見せる異常な攻撃性などは明らかに戦争及びその後のキャンプ生活の影響であろう。また、一部の子供は物を盗む癖もあるようであつた。事実、縄跳びなどを貸し出してもこちらが強制的にとりかえに行きたくまり返さない子は多かつたし、返せといつても「持っていない」という子供もいた。ブランチ島では、長谷川君や福田君のカメラやウォークマンが盗まれたようだが、ストブレッツチでもウォークマンなどは盗まかけたこともあつた。残念なことであるが、娯楽品は不足しているし、彼らは買うこともできないので、必然的にそういう癖がついたのかもしれない。カメラやウォークマンなどの高価なものについては特に気をつける必要がありそう、子供に貸したりはしないほうが良い。

また、攻撃的だと先に述べたが、けんかはやはり多く、また、空手などの格闘技に対する人気も高かつた。私は最初は未熟ながら空手を教えてみた

いと思ったのだが、けんかに使われてはたまらないと思って断念した。少し話はそれるが、たとえば空手に関する、謙虚さが美德とされる日本では「俺は空手をやっていた」といっていきなりデモンストレーションを始めれば、軽蔑の対象になるのだが、欧米では少し違う。逆にデモンストレーションをしないと信じてもらえないのである。だから私は、何かやってくれといわれればやったり、時には「脅し」としても使った。(もちろん、煉瓦などを割ることなどできないのだが、日本人に空手とくればある程度強そうに聞こえるのである。)このへんが日本とのメンタリティーの違いであろうか。キャンプでは特にその傾向が強かったような気がした。

しかしその攻撃性が反面では気の強さとして現れていて、これは非常にたくましく感ずるときもあった。小さな子供が大きき子供に対してたった一人で立ち向かっていく姿を見ていると、何か私が見忘れてしまった反骨精神みたいなものを感じた。

5 自分の中の葛藤

(1) 自分に何ができるのか

「果たしてクロアチアまでいったところで、自分に何ができるんだろう？」これは日本にいるときからずっと抱いていた疑問であった。自分の特技といえば、ずっとやっているといる軟式テニス以外に何もない。しかし難民キャンプでテニスができるわけでもない。いったい自分に何が教えられるのである。ただ押しかけるだけでかえって迷惑なのではないだろうか。こんなことをいつも考えていた。

実際に来てみると、一か月という短期間でもできることは多かったと思う。いくつか例を挙げてみたい。たとえば、月並みなことであるが、活動を通して日本を紹介することである。先にも述べたように、日本人というのは現地ではとても珍しく、日本に関する簡単な地理や文化の説明も結構多くの人が喜んで聞いてくれる。また、折り紙や紙芝居、縄跳びなども立派な日本の文化の紹介である。ただでさえ狭い世界に閉じ込められている人々に遠い世界のことを教えることは気分転換にさえもなる。

次に、話し相手となることである。彼らの中には、「外国から来た人に、ボスニアや私たちにすることを話したい」という人がいた。外国では余り正確に状況が知られていないという意識からであろうか。また、極東から来た日本人に対してだから言えるということもあるかもしれない。また、特に子供たちは、何かを計画してくれる人を必要としている。私たちは基本的に日曜日と月曜日が休日だったのだが、「日曜日は何やっての？」と子供に聞いてみると、「何も」とか「テレビを見ていた」などの答が多い。もともと彼らは暇な時間が多く、行動範囲も狭いため、自分達で遊ぶことに飽きてしまったのかかもしれない。そこで私たちが、「サッカーをやるう」とか「新しいゲームをやるう」とかいうことは意味があった。ま

たそうすることでわたしたちがいなくなったら後にも自発的に時間の使い方を考えてほしいと思った。事実、わたしたちが教えたゲームを暇な時間に勝手にやっている子供達もいた。

このように、少なくとも私たちには「非公式大使」としての役割はある。しかしいつも何か専門的に教えられることがあればという気持ちは消えなかった。

(2) どんな態度をとるべきか

子供や大人と接するに当たってもっとも気を使い、そしていまだに結論が出ないのは、どのような態度で接するべきなのかということである。もし20才くらの青年や女の子があなたにっこくちよっかいを出してきて、時には余りに暴力的すぎるような場合あなたならどうするか。もし16才くらの少年があなたの持ち物物を盗もうとしたときあなたはどうか。もし日本でそのような状況に陥れば、あなたははおそらく激怒するか、時には殴るであろう。しかし旧ユーゴスラビアのような状況ではそう簡単に割り切れない。もし盗みを働いた少年の両親が共に虐殺されていたら？もしあなたが好きでもそれを表現する方法が解らなくてちよっかいを出しているとしたら？あなたはどうか行動するであろうか。

私は個人的に、勤めて日本にいるときと同じ感覚で振る舞おうと思おうししていた。というのは、明らかに彼らがやや正常ではない（もしかするとただ単に子供であるからで、どこの国も同じなのかもしれないが）と判断し、自分にできることは、「正常な感覚」、つまりこりいうことをしたら人は怒るんだよとか、これは共同生活を上ではいけないことなんだよとかいうことを教えたかたからであつた。（しかし、ただ単に本気で頭に来たそのまま怒っていただけのとときのほうが多かつたかもしれない。）

先にだした例は、実際にあつたことである。余りにもこく私にちよっかいを出した青年を私は思わず殴ってしまった。（けつの下に画鋲を置かれれば誰でも怒るであろうが）。以来彼はアクティヴィティにはまったく来なくなり、私を避けるようになった。同じ様な女の子に対しても怒ってしまったが彼女も私を避けるようになった。メンバーの一人のウォークマンを借りたまま盗もうとした（実際には「彼は盗もうとしている」という密告があつただけで真相は解らないが）少年に私は激怒しそれ以来彼も私と目を合わせることとはなくなつた。その時は、そんなこと当たり前で、ぶん殴らなかつただけでありがたいと思えぐらいにしか思わなかつたが、いざ冷静になると、戦争で傷ついている心を更に傷つけてしまったのではないかとか、やりすぎてしまったのではないかといった思いと、いやあれで良かったのだという思いが入り乱れた。実際に、悪ができて我慢して相手してやっていると心に心を開いてくれた子供も数人いたのだ。

子供たちは、戦争を経験し、心にトラウマを持っているかもしれない。またそうでなくても、内戦の4年間分精神的な発達が遅れているような気が

する。つまり、20の子は、16才の子は、16才の子は12才の子のようである。あなたならどう彼等に接しますか？

6 スンツォクレットに関して

(1) トランジット

ストブレッチのキャンプにいる人々は、外国へ行きたい人やその順番待ちをしている人が多く、キャンプはつまりトランジットのための、一時的な待ちあい所の様になっていると聞いていることがある。そのため、以前と違い、現在はコミュニティーのようなものもなく、活動自体もやりにくく、キャンプに残る人はでどんどん仲間が出ていってしまうことに對して一種の焦燥感のようなものを抱いているのだそうだ。そもそも難民キャンプ自体が一時的なものだから当然といえば当然の結果なのかもしれないが。

さて、本題に戻ると、私は同じ様な印象をスンツォクレット自体にも抱いている。どういうことかというところ、「あたたたちにすべてを任せるわ」ということは、裏を返せば彼らはすでにネタ切れであって、そこへ奇妙な日本人の大道芸人の一団が来て、「場つなぎになってラッキー少しゆくりでさるわ（と彼等が言ったわけではないが）」と受け取れないこともない。更に彼らのやるプログラム自体も長い活動の歴史があるにもかかわらず、意外とその場限りの即興的なものが多い。さらに「我々は子供に嫌われたら成り立たないのだから子供がやりたいことをすればいいのさ」と聞き直る始末。以上は現場の話だが、事務所で管理している人達も「俺たちは忙しいぞ」という雰囲気を変えてはいるが、実際にそうなのかは大いに疑問。

(2) これからの「ひまわり」

これは私の勝手な想像であるが、おそらくスンツォクレットも設立時は崇高な理想に燃えた学生によって作られ、活気のある組織であったのである。しかし、たいていの組織がそうである様に、一定の期間が過ぎると理想はだんだん忘れられ、ただ日々の雑務に追われるだけの倦怠感が人々の心に芽生える。さらにキャンプの人々の移り変わりも年と共に激しくなり、なかなか継続した活動というのも難しくなる。キャンプ自体も内戦の形式的な終了で縮小傾向にある。メンバーのやる気もだんだんなくなる。そこで登場するのがスンツォクレットの高い給料を自当てるにやってくる「どうせ何をやっても大して変わらないんだから気楽にやろうぜベイビー」とばかりにいいかげんなことをやり始める人々。しかもいずればかの仕事につきたいと夢見ている人々にはうつつの仕事を来たもんだ。そして最後には、スンツォクレット自体をトランジットの場所と考える人によって占められ、そして消滅する、といったところがシナリオであろうか。

以上のことは、少々誇張して書いているが、今のままであれば、余り存在の意義のない組織になってしまうことも十分にありえると考える。彼ら

に必要なのは、もっと長い目で活動を考えることができる、職業ボランティアなのではないだろうか。

7 次のボランティアの方々へ

(1) スペシャリティ

もし次のボランティアの方々が、私たちの行ったところと同じ場所、つまりストブレッチャやステイヴアーンに行かれるのであれば、何らかの特技が必ず必要だと思う。というのは私たちはおそろく彼らの見る初めての日本人（個人としては1996年の夏に尾川治子さんという方が派遣されているが、いわゆる団体の日本人としてはという意味）であったので、ある意味何をやっても興味深く、それなりにおもしろかったと思うが、二回目ともなるとそうはいかないであろう。スポーツなり、学問なり、芸術なりに何らかの得意分野があれば、それを一か月間継続して教えることができる。余りにも即興的なものしかやっていないキャンプの人々に何かを残すことができる。日本語を教えること、英語を教えること、サッカーチームを作って定期的に練習することなどやることはいくらかでもある。ただ単に楽しく遊ぶだけが能ではない。一生懸命なにかに打ち込む楽しさを教えてあげてほしい。それができなかつたことが、自分では今悔いとして残っている。

(2) 主体性

何かを位置から始めるときに大事なのは強い主体性である。私ももうひとおし足りなかつたと反省している。外国人であるということに甘えずに、ぐいぐいとクロアチア人のボランティアさえも引っ張るくらいのパワーが必要だと思う。スツォクロレツトのスタッフは皆自己主張は強いが、納得の行く理由を説明できれば意外に素直に引き下がる。

終わりに

結論としては、私たちの活動がどれほどキャンプの人に貢献できたかということとは分らない。しかし、たった一か月の活動でそれほどの効果を期

待するのはなかなか無理だろう。私たちは、ひまわりの種を蒔いた自信はある。それを育て花を咲かせるのはこれからの活動にかかっている。豊かな日本から、これといった特徴のない普通の人がボランティアと称してまったく不幸な状況に陥った人々のところに行くなど、しょせんは偽善という人がいるかもしれない。確かにそうかもしれない。実際に私がクロアチアにいった理由の50%以上は自分で世界で何が起きているのかを経験してみたいという、いわば自分自身のためであった。しかしそれでも何もしないよりはましなのだ。一番大事なのは結果を出すことであるが、その次に大事なのは何かをやってやろうと思つてとにかく行動することだと思ふ。

また、避難民の人々は決して絶望してしまっている”helpless”な人々ではない。苦しみの中から何かを見いだそうとしている人は大勢いる。確かにもうだめになっている人もいるが、一筋の光を放っている人もいる。私が怪我をしたときにあつた女性の医者である一人の避難民は微笑みながらこういった。「サラエボは医者が必要としている。だから私は帰らなければならぬ。」その笑顔には、のほほんと過ごしてきた私にはない暗い陰とそれを乗り越えようとする強い意志があつた。彼女は戦争で夫をなくしているのだ。困難は人をだめにするか成長させるかどちからかであるということを知ることがある。避難民の人々がどちらに転ぶかは分からないし一番大事なのは本人たちの努力なのであるが、ほんの少しでも心の支えになつてあげようではないか。いつか大輪のひまわりを彼らの心に咲かせるために。最後に私にチャンスくれた須田氏と、一緒にクロアチアに行つた皆さんには深くお礼を申し上げたい。

Republic of Croatia

